YoRAP 2012–2013「〈″女″同士の絆〉を考える」報告
〈学業〉と〈ケア〉の両立を考える

発話者
松﨑実穂
ジェンダー研究センター 研究所助手
二木泉
国際基督教大学ティーチングアシスタント、NPO法人サポートハウスじょむ事務局長

このトークセッションは、大学・大学院在学中に「育児と学業」「介護と学業」を経験したふたりが当時の経験を振り返り、シェアするために企画された。発話者は、本学の院生当時に出産、育児を経験した二木泉さんおよび、本学の学生当時家族の介護を経験した筆者の二名であった。

セッション前半では、まず発話者の育児・介護歴が紹介され、当時の経験が詳細に語られた。まず二木さんから、在学中の出産・その後育児をしながら学業を継続する中で起こったさまざまな出来事をお話しいただいた。二木さんはICU在学中の出産の際、一学期間休学したが、どのような理由であれ休学の際には費用がかかり、また復学時は健康診断書の提出が求められたため診断費用の負担も生じた。それに加え、復学前は保育所の利用ができないため、健康診断を受ける際は乳児を預ける先を探さなくてはならず、その負担も生じた。また保育所への入所は有職者が優先されているため、学生はそもそも保育所を利用しにくく長女と別の保育所に預けることになったという問題もあった。学生が出産した場合、復学後は、クラスへの出席、宿題、論文執筆はもちろんのこと、リトリートやゼミ合宿といった泊りがけのイベントも、子供を預けながらこなす必要がある。仕事と違い、学業は誰かと分担することができない。子どもの病気都合等での遅刻・欠席や早退を補う仕組みはない。そんな中、学内では「子どもは好きで産んだのでしょう」、社会の中では「好きで学生をやっているのでしょう」という空気を感じてきた。学業と育児を並行している人間は中途半端な存在であると感じ、自らもそうした価値観を内面化していたという。そのため、常に孤独を感じていたし、「大変なのは当たり前」と、子ども

の預け先に困っても、また経済的に困っても、人に相談することは考えられなかったという。

続いて、筆者からは学生時の祖父の介護経験について語った（それは介護保険制度施行前のことである）。筆者は大学進学のため祖父母と同居を始めたが、祖父の認知症が進むにつれ主介護者である祖母の補助として介護役割を担うようになっていった。自身を含めて家族は徐々に疲労が蓄積し、さらに別居家族や親族のコミュニケーションにおいて板挟みになるが、かといって筆者が家を出て介護放棄することは選択できない状況であった。10代後半～20代前半の当時、まず誰に相談したらいいのかがわからなかった。介護の話題は周囲の友人にはあまり理解されず、おとな＝社会人に話してみても「（介護に）あなたは関わらなくてよい」と言われることもあり、だんだんと人に話さなくなっていった。その後、祖父の症状の悪化により、睡眠不足、疲労の蓄積、無力感に襲われるなど、体調面・メンタル面への影響が増していった。当時は行動や選択に対して様々な制限を自ら課していたのだが、そのことに自分で気づけていなかった。例えば、家を空けている日は毎日祖母に電話をして状況を確認するなどである。また進路を考える際には、自分自身の就職状況によっては祖父の介護者が実質祖母だけになってしまうことを予測し、そのために積極的に就職を考えることができないなど、キャリア選択にも影響があった。

学生という立場について、以上のような経験を経た上で言えるのは、育児に関しては「学校では『健常』で『時間が自由になる』学生が想定されており、『子どもを持つ』学生がいるということは想定されていない（二木さん）」ことである。そして、介護に関しても「学生は保護者に養われて学業に専念している者（＝子ども）と見なされており「面倒を見る方の立場（≠子ども）」になる可能性は考慮されていない（筆者）」と言える。

本トークセッションのタイトルは「〈学業〉と〈ケア〉の両立」であったが、そもそも学生が行う〈学業〉と、育児や介護をはじめとする他者への〈ケア〉は両立されること自体が想定されていないのが現状ではないだろうか。

ここまでの発話者の話を受けて、続いての自由討論では、参加者それぞれから今までの、または将来の自分自身の仕事・学業と、育児・介護に対する思いが語られた。たとえば在学中に家族の介護に関わってきた方や、在学中からの

育児を想定されている方からは、学内の友人・知人には、育児や介護についての自分自身の経験や気持ちを打ち明け、共有するということができない、ましてや相談もできないことから、孤立感・疲労感を感じていることを伺った。また実際に、在学中から育児や介護を継続している状況下で就職を考えなくてはならなかったが、就職してからの時間のやりくりを考えた結果、最初から非正規雇用を選ぶことにしたというお話もあった。

以上、今回のスピーカーの経験と参加者からの発言から共通して汲み取れるのは、まず学生が〈学業〉と両立して育児または介護を担っている場合、孤立する、あるいは孤立感を強く感じる状況になってしまいがちである、ということだ。この「孤立」とは、（1）学生本人の友人/知人ネットワークの中で話題が共有できない、気持ちがわかってもらえないという精神的感情的孤立もあれば、（2）育児や介護を引き受けていることにより他の学生と異なるタイムスケジュールで行動せざるを得ないという時間的空間的孤立もある。さらにこれらの孤立から、（3）友人/知人ネットワーク自体からの隔離または排除（それが意図的なものではなくとも）という更なる孤立が引き起こされるケースも考えられるであろう。さらに、学生というそもそも他者が代替できない立場では、ケア代替者を見つけることが容易でない状況の中、時間の指定されたクラスやゼミへの参加が必須であることから、ケアを引き受けている学生が（4）学校システムそのものからの孤立、についても考える必要があるだろう。

学生は学業に専念するのが本分であるという前提があればこそ、学生でありながら他者をケアする役割を引き受けることそのものが当事者にとっては「学生としてのわたし」と「ケアの担い手としてのわたし」という役割の間で引き裂かれることになりえ、また友人/知人ネットワークおよび学校システムからの孤立につながりうるのではないだろうか。また、ケアと学業を「両立」している人々が「話してもどうせわかってもらえない」と思うことにより誰にも話さなくなればなるほど、他者のケアを引き受ける学生の存在はますます不可視化されてゆくだろう。

今回は、まず学生の立場でケア役割を引き受けるという経験そのものがどのようなものであるかを、公の場である大学においてシェアすることが第一の目的であった。小規模なイベントながらも、その目的は達成できたと思われる。

一方、今後の課題として、まず第一に、今回は射程に入れられなかったケア役割を引き受けている学生への具体的な支援まで踏み込んで検討すること。第二に、そうした学生の状況それ自体を明らかにしてゆく作業が必要であろう。

ケア役割と学業の両立自体、従来（ケア研究の文脈においても）さして注目されてきたトピックではなく、その状況に直面している人が実際どれほど存在しているのかも、ほとんど関心や調査の対象になってこなかった。しかし今回このトークセッションを行ってみて、発話者のみならず、当日の参加者の中にも、ケア役割と学業の両立にまさに直面していたり、今後その状況を想定せざるを得ない方々がいらっしゃったことは、ここに明記してしかるべきであろう。

Report: YoRAP 2012–2013 "Thinking about <Bonds Between 'Women'>"
Considering the compatibility of <studies> and <care work>

Tuesday, 15th January, 2013

Speakers
Miho MATSUZAKI
Center for Gender Studies, Research Institute Assistant
Izumi NIKI
ICU Teaching Assistant, NPO Support House Jomu, Office Director

This discussion was held by two women who experienced the compatibility of "childcare while studying" and "nursing care while studying" in order for them to reminisce and share their experiences. The speakers are Izumi NIKI (ICU Teaching Assistant, Office Director of NPO Support House Jomu), who gave birth and reared her child while she was in graduate school in ICU, and Miho MATSUZAKI (ICU Center of Gender Studies Research Institute Assistant), who was devoted to the nursing care of her family in her undergraduate years.

<Studies>, conducted by students, and <care work>, done for others such as with child bearing and nursing care, have never been considered as compatible. In addition, students who study and engage in care work simultaneously tend to be solitary, or at least feel strong isolation. This "isolation" is mainly defined as:

1. Emotional Isolation: Unable to share feelings with others and be understood by the network of friends of the person concerned.
2. Temporal/Spatial Isolation: Being compelled to have a different time schedule from his/her friends because of care work.
3. Further isolation caused by segregation or elimination from his/her network of friends (whether it is intentional or not)
4. Isolation from the educational system itself.

The tasks yet to be solved are

1. considering the specific support for students who undertake <care work>, and

2. Making the situation of "doing <care work> while studying" itself visible. The compatibility of <care work> and <studies> have never been focused on before. However, it is important to note that those who experienced that situation are not limited to the two speakers; there were those like them among the audience.